現代フランス研究会（Groupe d'Etudes sur la France contemporaine,略称 GEFCO）活動報告

西山教行（世話人を代表して）

この研究会は、フランス語教育の発展のためには、効果的な教授法の研究・開発に加えて、フランス及びフランス語圏の文化社会研究も必要であるとの認識のもとに出発した勉強会的性格の研究会です。

日本におけるフランス語教育は、文学を中心としたフランス文明に基づく教養主義から、その後、コミュニカティヴ・アプローチによって「使えるフランス語」の教育へと転換が図られてきました。しかし、実用性を訴えるだけでは、「グローバル・リテラシー」論を展開する英語に対抗する議論を進めることはできません。一方、情報ソースとしてのフランス語、フランス語で表現される独自の思考、「共和国」という社会モデルなどは、文化の多様性が問題になる現在、重要なレフェランスの一つとして近年注目を集めています。また、ヨーロッパからマグレブ、アフリカ、中近東、北米、カリブ海に広がる仏語圏の文学や地域研究も今後ますます研究すべき未開拓分野として残されています。

さらに、最近の教員の公募状況を見ると、採用条件として文学や語学だけではなく、フランス語＋比較文化論、地域研究、ヨーロッパ文化社会論、異文化間コミュニケーションあるいは情報技術を含む情報コミュニケーション論を教えられる能力が求められています。今後、フランス語教師のダブルメジャー化はますます要請される傾向にあります。このような未来の教師を取り巻く状況をも視野に入れると、GEFCO は、私たち会員自身の再教育訓練の場となるだけではなく、新しいプロフィールを獲得しようとする院生など若手のフォルマシオンの機会にもしたいと考えています。

研究会の参加者は原則として教育学会の会員としますが、フランス語教育に直接関わらない社会学、政治学、歴史学などの分野の研究者にも開かれた、タコツボ的縦割りを横断する学際的フランス研究の場となることを願っています。

GEFCO での発表は狭い意味でのフランス語教育に関するものだけではなく、文化社会研究など、フランス、またはフランス語圏に関する研究ならどのようなアプローチのものでも歓迎しています。現在のところ､研究会の研究活動のテーマとしては、フランコフォニー(文学を含む)､政治哲学、社会思想､文化政策､ジェンダー研究､移民研究、植民地主義などがあげられます。

例会活動記録

　これまでに 7 回の例会､フランス人講師による 2 回の特別セミナーを東京の日仏会館を中心として実施し、毎回平均 20 名の参加者を集めました。

第 1 回　2000 年 11 月 18 日

・長谷川秀樹(千葉大学)「コルシカの歴史・言語・政治」

　コルシカの歴史をふまえ、その民族主義の動向、コルシカ人民の法的承認、コルシカ語の地位、自治権といったコルシカ問題をフランス共和主義やコルシカ・ナショナリズムとの関連で論じた。

第 2 回　2001 年 2 月 4 日

・三浦信孝(中央大学)「欧州統合とフランス：曲がり角のニース・サミット」

　50 年に及ぶ統合の歴史的プロセスを確認し、先頃のニース・サミットに到る近年の事実を踏まえながら、欧州が価値観や世界ヴィジョンのレベルで孕んでいるさまざまな対立の構図を描いた。

・西山教行(新潟大学)「危機にあるフランス語普及：その意義と 21 世紀への方策」

　英語第 2 公用語化論に代表されるグローバル化のなかで、英語を「市場対応言語」、フランス語を「レギュラション型（政策）対応言語」と位置づけ、フランス語を日仏の二極関係に限定されない視点から、国際言語としての意義付けをめざす言語普及・教育の可能性を検討した。

第 3 回　2001 年 4 月 22 日

・ 有田英也（成城大学）「ユダヤ系フランス人の近代」

　19 世紀におけるユダヤ民族の変容をたどり、ナショナリズム、国民教育、宗教、反ユダヤ主義等々の問題を考察するなかで、国民国家における異民族のアイデンティティの在りか、国家とエスニシティーの関係などを考えた。『ふたつのナショナリズム―ユダヤ系フランス人の「近代」』(みすず書房)の著者による発表。

・堀　茂樹（慶応大学）「フランスにおけるソーカル事件その後」

　先端科学用語を散りばめたポストモダンの言説の一部が、権威主義的な衒学趣味（「ファッショナブル・ナンセンス」）に過ぎないことを証したソーカルの『「知」の欺瞞』（岩波書店）をめぐり、論争の経緯とそれが知の世界に巻き起こした課題を検証した。

第 4 回　2001 年 6 月 17 日

・尾崎文太（一橋大学言語社会研究科博士課程）「戦後マルチニーク社会の諸問題 ：「同化＝海外県化」の位置」

　マルチニーク人のアイデンティティーは、フランス共和国の一員としてのアイデンティティーと、マルチニークという固有のアイデンティティーの間で揺らいでいるが、その対立・矛盾の図式をとりわけエメ・セゼールにおいて考察した。

・平野千果子(武蔵大学)「十九世紀フランス植民地主義の一側面：イスマイル・ユルバンを通して」

　ナポレオン三世の植民地顧問を務めたイスマイル・ユルバンは、フランス人の父と黒人奴隷の孫を母にもつ間に生まれた混血児であり、その漂白の生涯を通じて 19 世紀のフランス植民地をめぐる状況、すなわち奴隷制度（1848 年に廃止）、人種差別問題、宗教問題などを考察した。

第 5 回 2001 年 9 月 23 日（大阪、日仏センター）

・井形和正（一橋大学言語社会研究科修士課程）「フランスの移民問題：ソニンケ人を中心として」

　パリにおけるアフリカ人移民労働者の 70%を占めるのはサハラ砂漠以南に多く居住するソニンケ人である。今回は、パリ及びセネガルでの現地調査をもとに、パリ在住ソニンケ人の状況を考察し、フランスにおける移民問題の展望を考えた。

・松葉祥一（神戸市看護大学）「主権と市民権：E. バリバールの議論を中心に」

　統合ヨーロッパを一つの主権国家とみなすのか、複数の主権国家の連邦と見なすのかという二者択一との関連において、いま主権が問題になっている。国籍＝市民権＝主権の主権概念をめぐる等式から、国籍の項を消去する可能性を探るバリバールの政治哲学を考察した。

第 6 回 2001 年 12 月 9 日

・粕谷祐己(金沢大学)「アルジェリアにおける rai とフランスにおける rai」

　アルジェリア西部オラン地方に生まれた民衆歌謡の一ジャンルである rai はアルジェリアそしてイスラム圏の政治状況に深く関わっているだけではない。現在では移民二世世代のメンタリティや生き方を総体的に表す言葉としてフランス文化の一部となっている。今回は rai をめぐる 2 国の現在を考察した。

・荒又美陽（一橋大学社会学研究科修士課程）「ピラミッド論争の争点は何か ：パリにおける景観形成とその思想」

　ルーヴル美術館に建設されたガラスのピラミッドをめぐる景観論争をたどり、パリにおける新たな景観がいかなる意味を持っていたか考察し、ピラミッドの象徴性のいくつかとその背景を検討した。

第 7 回 2002 年 2 月 3 日

・岩本和子(神戸大学)、伊川徹（芦屋大学）ほか「フランス文化社会論シラバスの検討」

多くの大学で実施されているフランス社会文化論に関して、担当者などがシラバスを持ち寄り、個人で実施する授業形態やオムニバス形式の授業などについて、情報交換ならびに自己点検を行った。

・『普遍性か差異かー共和主義の臨界、フランス』(藤原書店)

会員の何名かが執筆した論集の合評会を実施した。本書は執筆陣に多くの GEFCO メンバーが参加しており、いわば GEFCO の最初の成果と言ってもよい。

第 8 回 2002 年 4 月 14 日(予定)

・北川忠明（山形大学）「アラン・ルノー研究」

・ 宮代康丈（慶応大学 SFC）「アレクシス・ド＝トクヴィル研究」

なお、2002 年秋には研究合宿を計画しています。

特別セミナー

第 1 回　2001 年 3 月 26 日

・マルク･ゴンタール（オート・ブルターニュ大学）「セガレンからグリッサンへ：＜多様なもの＞の詩学のほうへ」

第 2 回　2001 年 4 月 11 日

・ジャン・ブリクモン（ルーヴァン大学）「私はなぜ『「知」の欺瞞』を書いたのか？」

今後さらに、さまざまなフランス人講師によるセミナー（批評家のトドロフ、思想史家のタギエフや植民地史研究のブランシャールなど）を計画しています。

研究会の中期目標

GEFCO は例会を中心とした研究活動に加えて、研究の成果を社会に貢献すべく、次のような中期目標を策定しています。

1）ハンドブック『現代フランスを知るためのキーワード 50』の分担執筆。

これは、フランス的世界への知的興味と、仏語学習への意欲を刺激するような本で、項目となる語を 50 程度とし、語によって見開き 4 頁もしくは 2 頁をあてます。網羅的なものにせず、話題性豊かな、掘り起こすと連鎖的にさまざまな意味が立ち上がってくるようなワードを優先し、問題提起的な、ときに挑発的な内容をも盛り込みたいと考えています。実現すればフランス文化社会論のいい教科書になると考えています。

項目については､人権、共和国、ナシオン、国家、人種差別、国籍、68 年 5 月、人道活動、アリアンス・フランセーズ、アカデミー・フランセーズ、カフェ、学校、教会、外国人、 移民、市民、ヴィシー、欧州統合、グランゼコール、大学、離婚、ENA、革命、バカロレア、哲学、大統領、 DOM-TOM、クレオール、コアビタシオン、コルシカ、第５共和国、多言語主義、地域語（少数言語）、ル・モンド、カナール・アンシェネ、 緑の党、失業、トゥール・ド・フランス、パックス、パポン裁判、パリテ、家族、フランコフォニー、ライ、ライシテ、知識人、サッカー等を検討しています。

2)『フランコフォニー･アトラス』Atlas de la francophonie の刊行。

これは、フランコフォニーがどのように形成されたか､フランス語圏、フランス語を何らかの形で使用する国の紹介、またフランコフォニー文学の概観､フランコフォニー運動の国際的展開などに関する本で、会員の分担執筆による出版をめざしています。フランコフォニーに関する日本語の概説書がないことから、これもまたフランコフォニーに関する授業の教科書となると考えています。

会の運営

日仏会館フランス学長との交渉により、定例セミナーの会場費が無料となりましたので、研究会の会費は徴収しません。どなたでもご自由にご参加ください。また、会の運営事務軽量化のため、インターネット上でのメーリングリストにおいて連絡や議論を展開しています。入会ご希望の方は､ホームページの入会方法をご覧ください。(ホームページアドレス http://www1.odn.ne.jp/cah02840/GEFCO/)

GEFCO への参加資格は、フランス語の授業を担当している中等および高等教育機関の教員をはじめ、社会学、政治学、歴史学、法学その他、フランス語圏をフィールドとするあらゆる分野の研究者、院生に開かれています。

世話人：三浦信孝(中央大学)・堀　茂樹(慶応義塾大学)・西山教行(新潟大学)・長谷川秀樹(千葉大学)